

7 土屋に伝わる民話・昔話（口頭伝承）

土屋に伝わる言い伝え（口頭伝承）は、この地区が中世からの長い伝統を引き継いでいるためか、その数も多く存在します。ここに、その伝承の一部を記し紹介します。

- | | |
|----------------------------------|---------------------|
| (1) 和尚さんと小僧 | (2) ねずみにだまされたねこ |
| (3) 燕（ツバメ・ツバクロ）と雀（スズメ） | (4) 灰の縄（ハイのナワ） |
| (5) 十二支と狐（ジュウニシとキツネ） | (6) 猫の踊り（ネコのオドリ） |
| (7) 湯と沢庵（ユとタクアン） | (8) 百万匹のねずみ |
| (9) 五月節句の菖蒲屋根（ゴガツセックのショウブヤネ） | |
| (10) 一つ目小僧と道祖神（ヒトツメコゾウとドウソジン） | |
| (11) 真田の与一（サナダのヨイチ・・・サナダのヨイツツアン） | |
| (12) 花籠の台（ハナカゴのダイ） | (13) 大野善九郎 |
| (14) 持宝院の僧 | (15) 降魔の数珠（ゴウマのジュズ） |
| (16) 武藤柿（ムトウガキ） | |
| (17) 泣の原のお地蔵さん（ナキのハラのおジゾウさん） | |
| (18) 相模国月牌帳（サガミノクニゲッパイチョウ） | |

(1) 和尚さんと小僧

むかしむかし、寺分の正藏院は、今のような無住寺ではなく、大きな本堂を持った立派なお寺でした。正藏院には、和尚さんと三人の小坊主がいました。

和尚さんはなかなかのけちんぼうでした。小坊主どもがいくら一生懸命に働いても、自分ばかりうまいものを食って、ちっとも小坊主どもには分けてくれませんでした。

ある日のこと、檀家から本尊さんにたくさんの餅が上げられました。小坊主どもはそれを見て、あの餅は和尚さんばかりに食わせないで、自分達も食ってやろうと三人で相談をして、和尚さんの前へ三人そろって出ました。

「珍しく三人そろってなんのようだな。」

「和尚さん、三人名前を変えることにしました。」

「ばかに急な話だが、それで名はなんとした。」

「今日から、プウプウとパタパタとウマウマに名前を変えます。どうか和尚さんもそう呼んでください。」

「おかしい名前だが、まあよからう。」

和尚さんは半ば呆れ顔して、小坊主どもの改名を承知しました。

晩方になりました。和尚さんは餅が食いたくなったので、小坊主どもを、寝部屋に追い立てました。隣の寝部屋に引っ込んだ小坊主どもは、寝たふりをして耳を澄ませています。やがて和尚さんは戸棚から餅を出して、こっそり焼き始めました。そのうちに、餅を焼く香ばしい匂いが、小坊主どもの鼻に届いてきました。

すると食いごろになったらしく和尚さんは灰の中から餅を取り出して、パタパタと灰をはたき落とし、プウプウと熱い餅を吹くと、頬張ってウマウマとうまそうに食いはじ

めましたので、待ってましたとばかり小坊主どもは三人揃って、

「ハイ」「ハイ」「ハイ」と返事よく、和尚さんの部屋にかけこみました。そして「和尚さん、御用ですか。」と聞きました。あんまりだしぬけのことで、和尚さんは焼いた餅を隠す間もなかったものだから、小坊主どもにも、鰯腹（たらふく）餅を食わせてくれました。

安池正雄編 “ 神奈川の民話 ” より

（２） ねずみにだまされたねこ

十二支という、この呼び方は、干支（えと）ともいわれ兄と弟のことを意味するものであり、中国から伝わったともいわれています。

この十二支について、土屋に伝えられる由来はこうなっています。・・・・・・

昔、大神宮さんが、元旦の朝お年頭（一年の始め）をいいに来ました。そして、一番から十二番までの者は、順番で一年間だけ、親方にしてやるとおふれを出しました。

元旦の朝、牛が早く出かけるとねずみはその牛の背中に飛び乗りました。牛はそれを知らず、自分が一番乗りだと思って門が開くのを待ちました。門が開くとねずみがサッと降りて一番乗りをし、牛は二番になりました。猫は、日を忘れてねずみに聞いたところ、ねずみは一日遅らせて教えました。そのため猫は一日遅くなり、大神宮さんに叱られ、けだものの仲間から外されました。それで、今でも猫はねずみと仲が悪く、追いかけてかみ殺してしまうーーーーーということです。

もちろん昔話ですが、十二支の順番は、

子	（ ね	=ねずみ	）
丑	（ うし	= 牛	）
寅	（ とら	= 虎	）
卯	（ う	=うさぎ	）
辰	（ たつ	= 竜	）
巳	（ み	=へび	）
午	（ うま	= 馬	）
未	（ひつじ	= 羊	）
申	（ さる	= 猿	）
酉	（ とり	= 鳥	）
戌	（ いぬ	= 犬	）
亥	（ い	=いのしし	） になっています。

（３） 燕（ツバメ・ツバクロ）と雀（スズメ）

親が病気になったとき、雀はそのまま急いで飛んできましたが、燕はお化粧をして頭をきれいにして飛んできました。その褒美にすずめは「穀物」を採って食べることができ、つばめは「虫」を捕って食えと言われたそうです。

(4) 灰の縄（ハイのナワ）

・親を姥捨山（ウバステヤマ）に捨てようとしたところ、灰の縄を持ってこいといわれ、どうしようかと考えて、親に聞いたら「縄をなつて」燃やせばいいと教えられました。それから姥捨山に捨てるのを止めました。

・親孝行な息子が殿様から灰で「縄をなえ」といわれました。母に聞いたら「なった縄」を燃やして灰にして献上しました。

(5) 十二支と狐（ジュウニシとキツネ）

侍がおじいさんとおばあさんの家に泊まりました。そうしたら、その家に何もなくておもてなしをするのに、おばあさんが「おじいさん、半殺しにしようか。それともみな殺しにしようか。」と聞いたら、旅人の侍はびっくりしました。

（注）半殺し：おはぎのこと、みな殺し：ぼたもちのこと。

おはぎは糯米（もちごめ）を潰さず作るが、ぼたもちは糯米を臼で潰し餅にして作るのでこのように表現したようです。

(6) 猫の踊り（ネコのオドリ）

猫が立ち上がって、平塚の八幡様の杜（モリ）で踊っていると、秦野の羽根のおやじが夜帰ってきて、ここで一服（イップク）休んでいたら、「今日は、羽根の八郎がこねえな。」と話していたら、「ああ、来た来た、きょうは、おっかあのー（不明）あがって、アチイ（熱い）お茶だか、オケエ（お粥）だかで口をやけどして笛は吹けない。その代わり子供を火の中へつつこんでやった。」家に帰って羽根の八郎という人が聞いたら、そのとおりだった。

(7) 湯と沢庵（ユとタクアン）

ご飯のあと、お湯を飲むのにコウコ（コオコ・沢庵）を入れかきまぜて、冷まして（サマシテ）飲むので、風呂に入るときに、湯が熱いと「タクアン持ってこい。冷まして入るから。」という話があります。

(8) 百万匹ねずみ

おばあさんの話で、ネズミが百万匹集まって伊勢参りに行こうと相談して、一匹が馬入川へ「バチャン」と入った。百万匹も「バチャン」と入った。

もう、おばあさん「バチャン」はいいから次へ行きなよと言ったら、おばあさんは「ピョン」と岸から上がって動物が身を振るって水を切る真似（マネ）を百万回もしたという。

(9) 五月節句の菖蒲屋根（ゴガツセックのショウブヤネ）

五月節句の菖蒲・蓬（ヨモギ）・ススキを屋根に挿（サ）すのは、神功皇后が朝鮮征伐に行くのに、子どもを菖蒲・ヨモギとススキ（カヤ）でふいた家の中に置いていたら、丈夫に育っていたので、こうするようになったという。

(10) 一つ目小僧と道祖神（ヒトツメコゾウとドウソジン）

1月28日に一つ目小僧が帳面を道祖神に預けていった。それを1月14日のダンゴ焼き（ドンド焼き）で焼いてしまう。2月8日に一つ目小僧が来たとき、火事にあって焼いてしまった。貴い帳面を燃やしてしまったので、家の中に入らないといって、道祖神は野ざらしでいるんだという。

(11) 真田の与一（サナダのヨイチ・・・サナダのヨイツツアン）

石橋山の戦の時、真田の与一（真田義忠）と俣野の五郎とが組み打ちをした。五郎が与一に「オッフセラレ」（ねじ伏せられ）、そこへ与一の家来が来て、「真田の与一は、上か、下か。」と聞いたら、俣野五郎が「下だ」と答えたので、家来は主人である「上にいた」与一を切ってしまった。この時、与一はのどに「タン」がつかえて「上にいるぞ」と、言えなかった。「タン」のために家来に切られたので、「真田のよいつつあん」は「咳（セキ）の神様」として、奉られている。真田の「天徳寺」にある。

(12) 花籠の台（ハナカゴのダイ）

江戸時代の末期に、中村の女子と土屋惣領分の男子とが婚約して、挙式の当日花嫁が花籠で小田原街道の土屋小字清見原付近を通りかかろうとしたとき、一人の若者が現れて、花籠の外から籠越しに、花嫁を刀で刺して逃げ去りました。こういう事があつたので、ここは婚礼の際には通行禁止とし、他のめでたいときも、遠回りをして、決してここは通らないと言われています。

(13) 大野善九郎

むかし、土屋惣領分に大野善九郎という者がおり、そのころに大水害がありました。

善九郎は義侠心に富んでいたため、自ら住民の代表として年貢の減少を訴え出ましたが、それを聞き入れてもらえず捕らえられてしまいました。そして、中原御所の牢に入れられました。しかし、牢を破り京都に走り、ある時相撲を見ていたりしましたが、善九郎は興に乗じて尺八を両手にて拉（ひ）きまわしとして相撲場に現れ、相手を求めましたがその威勢に恐れて向かう者はなく、時の天皇の御上覧があり、その強力（ごうりき）を賞せられ、これに菊の御紋を下されました。

のちに、善九郎は郷（さと）に帰り、菊の御紋の旗を押し立てて、中原御所の前を通りましたが、誰の可する者は無かったということです。

これより大野の姓を有する者は、菊の御紋を使用しましたが、明治の御世になり、憚（はばか）って井桁の中に菊の紋章を入れて使用するようになりました。

また、善九郎は竹藪を開墾するため、竹を一本づつ引き抜いていきましたが、最後の一本が抜けなく、満身の力を込めて引き抜いたら、下で地神さんが引っ張っていまし

た。それっきり、善九郎は以前のような力が出なくなっていました。

(14) 持宝院の僧

熊野神社の別当持宝院に強力な僧がいました。近隣の農家に行き、四方山の話語り、金火箸を縫（よ）って縄とし、またもとの儘（まま）に直し、あるいは金目川の増水の時は門扉を持って川に入り、扉を横にして川上に歩いて行ったといわれています。また大野善九郎とは良き力相手になり、相撲をよく取ったとも伝えられています。

この僧はある時に江戸に行き、その帰途に4人の賊に会い、金銭の脅迫を受けましたが、悠然として煙草を喫し、側にあった沢の上の松を曲げて、ここに賊の腰を下げ、隙を見て松を反ね返して、賊を沢に落とし、自分は相州（相模国・現在の神奈川県）小熊の住人であると告げて帰りました。のちに賊は、この僧の熟睡を狙い蚊帳の四隅を切り落として僧に切りかかり、僧は長押（なげし）に掛けてあった槍（やり）を取り出しましたが、自由がきかず遂に切られて死んだと伝えられています。

(15) 降魔の数珠（ごうまのじゅず）

いつのころか、秦野の簀毛に旅亡人（旅人の死体）がありました。人々が近所の僧にお経をあげてもらいましたが、成仏しなかったので、次々と秦野地方の僧を呼んでみましたが、みんな駄目でした。

おおぜい集まった僧たちが相談して、これは大乘院の円海和尚をお願いしてどうかと、使いを出しました。和尚は、早速寺を出ました。すると、ひとりの老婆に会いました。老婆は言いました。「和尚さん、今日はお出かけを見合わせるようにしなさい。もしこの際、お出かけになると大災難が来ますよ。」と申しました。しかし、和尚は平気で簀毛に行き、到着すると旅亡人の家の前で娘が、先程の老婆と同じことを申しました。和尚は、せっかく出てきたのだからと、大勢の僧たちとお経を上げたところ、数珠を強く引く者がいました。姿が見えませんでしたので変に思い、その数珠で死人の上を横に払いました。すると手ごたえがあって、悲しいうめき声を漏らして、旅亡人は成仏しました。しかし、その時の数珠には鋭い魔物の爪の跡が残りました。

僧が寺に帰って来ますと、寺は火事でした。僧はこの数珠を弟子に授けました。その弟子が、矢沢（上惣領）の天宗院の住職につきましたので、この数珠は今も天宗院に有ります。世にこの数珠を名付けて「降魔の数珠」と伝えています。

(16) 武藤柿（ムトウガキ）

私の叔父石井芳雄は、昭和54年に69才で亡くなりました。従って生年は明治44年です。尋常・高等小学校の在学は、大正5年から13年ということになります。

男四人兄弟（下に妹がいる）の三番目です。他の3人の兄弟は、どうやらの学校を出て、小学校長や測候所長になっていますが、この叔父芳雄は小学校しか出ていません。そして、家業の百姓に精を出し、昭和16年頃に川ひとつ隔てたすぐ裏に分家しました。

私の父と3人の叔父のうち、私の成長にもっとも影響を与えたのは、この叔父義雄でした。その影響というのは、百姓のやり方や村のしきたり、年中行事など、いわゆる世

間知をいっぱい教えてくれたことです。

今になってみると、もっと沢山、もっと正確に、もっと詳しく聞いておけばよかったと思うことばかりです。

わが家の裏庭に、目通り（目の高さの直径）30cmの柿の巨木があります。この柿の木の話もそのひとつです。叔父義雄は、この柿の木を仰ぎ、こんなことを言っていました。

「この柿の木は、武藤柿（むとうがき）というのだ。俺が小学校のとき、武藤先生が退職され、その記念にと生徒に2本づつくれたのだ。土屋の子供は、普段ロクなものを食べていない。まして、甘いものなど食ったこともない。だから、この柿の木を植えて、甘いものをたっぷり食べ、と言ってくれたものだ。毎年よくなるな、ほんとうによい記念の木だ。この柿の種類は、富有（ふゆう）というのだ。」と。

ほんとうに武藤先生のおかげで、叔父義雄の世代、私の世代、そして私の息子の世代と、富有を十分に堪能してきました。

最近ふと思いました。叔父義雄の話が正しければ、武藤柿という富有は、土屋じゅうにあるはずだ。

そこで手始めに、寺分の年配者に尋ねてみました。すると、杉山憲三さんと安池治三郎さんはその話は聞いたと、安池淳三さんは、現にうちには2本あるとおっしゃいました。やっぱり土屋じゅうにあるのです。

ところで、この武藤先生とはどんな人物であったのか、残念ながら、叔父義雄はこの点については語ってくれませんでした。

しかし、この話から推してみると、武藤先生はなかなか先の見える、洞察力に富んだ人のようにみえます。この柿の木が、富有だということからです。

案外知られていないことですが、神奈川県は柿の先進県です。小田急の駅に「柿生」というのがあります。そこは川崎市の柿生です。そこに王禅寺という寺があります。1214年（建保2年・源実朝の時代）、王禅寺再建のため山に木材を伐りに行きました。その折偶然に、甘柿を発見しました。当時、全国渋柿ばかりだったので、この甘柿は大いに評判となり、（王）禅寺丸（ぜんじまる）と名付けられ、数百年の間に全国に普及していったのです。神奈川県は禅寺丸の原産地なのです。

時代は降って、1902年（明治35年）、農商務省農事試験場園芸部が設置されました。そこで、全国の柿の調査をしたところ、富有（原産地岐阜県）と次郎（原産地静岡県）が、最優良品種に選ばれました。そして、富有は大正時代に、経済栽培されるようになりました。

武藤先生はこれに着目されたのです。神奈川県には禅寺丸が普及していました。しかし、武藤先生はこれを排し、富有を選ばれたのです。武藤先生はなんと先が見え、洞察力に富んだ人かと感心せざるをえないのです。

この武藤柿を大事に育ててきた叔父義雄は、また柿にちなむ伝承を、教えてくれました。一つは、いささか残酷な「成木責め」（なるきぜめ）であり、もう一つは、心暖まる「木守柿」（こもりかき）のしきたりです。

「成木責め」は、1月15日（小正月）の行事です。「デエノコンゴウ」（安池淳三氏の説、私は「ウツノ木」と誤解していた）を、50cm位に2本とり、それを上下か

ら皮を裂き、ささくれにする。真ん中に半紙を巻き、麻で縛ります。それを神棚にあげたのち、「なるか、ならねえか、ならぬ」と不動さんに連れてって、頭一つちょん切るぞ」と、言いながら柿の木を叩くのです。

「木守柿」とは、てっぺんの二つ三つの実を、神様に捧げるものとして、残してやることです。天の恵みを、人間だけで独り占めしないで、小鳥たちにも分けてやることです。11月の秋空に、いつまでも真っ赤に輝いて残っている柿が木守柿です。こんな呪術のおかげで、わが家の「武藤柿」は毎年富有をたくさん恵んでくれたのです。

しかし、時は移りました。飽食の時代、受験戦争の時代になってしまいました。子供たちは、柿など見向きもしなくなりました。伝説・伝承などに、聞く耳を持たなくなっていました。

毎年5月上旬、安池治三郎さん、木村進さん、叔父義雄の長男正昭と共同で、苗代をします。そのあと、柿若葉（俳句の季語）の下で、楽しく談笑します。その折りに、この伝説・伝承の昔を懐かしむのです。

（寺分 石井正司氏のお話）

（17）泣の原のお地藏さん（ナキのハラのおジゾウさん）

むかし、土屋に仲むつまじい若夫婦がおりました。ふたりの仲は村でも評判でした。

ある秋の取り入れがすんだとき、夫は村の二人と連れ立って、お伊勢参りに出かけました。若い妻は、夫が見えなくなるまで見送りました。

お伊勢参りに行った3人は、無事にお参りをすませると、土産を手に家へと急ぎましたが、大井川まで来ると、上流に降った大雨で水かさが増して、川止めとなりました。一行は川を渡ることができず、金谷（かなや）宿で川止めがとかれるのを今か今かと待っていました。

若い妻を残してきた男は、何度も川会所（かわかいしょ）へ行って川止めの立札を見ては、重い足どりで宿へもどり、妻を忍んでうち沈んでいました。

その夜、男は仲間が止めるのも振り切って、川を渡りはじめましたが、中ほどで押し流されてしまいました。

やがて川止めがとかれ、連れの二人は土屋に帰ってきましたが、出迎えた妻にはほんとうのことが言えず、

「急に用ができたといって、伊豆の方へ行ったよ」「何でも舟で帰るといったよ」と、その場のがれに言いました。

「伊豆へ?! いったいどんな用事ができたのでしょうか。わたしには、そんなこと一言も言って行きませんでしたのに……」

若い妻はさびしそうに帰って行ったが、つぎの日から、虫窪（大磯町）の高台の原に立ってじっと海をながめ、舟が来るのを待っていました。次の日も、また次の日も、雨が降っても風が吹いても、若い妻は山道を通いつめ、高台の原に立って夫の帰りを待ちわびていました。



幾日もたちました。それでも若い妻は、山道を登って行くのでした。

見るに見かねた二人の男は、ほんとうのことを言わねばと、高台の原に行ってみると、若い妻は身も心も疲れ果てたのか、帰らぬ人となっていました。

この話を聞いた村人は、若妻の美しい心を忘れまいと、ここに地蔵を祀って供養をしました。それからこの原を、泣の原（泣ヶ原ともいう）と呼ぶようになりました。

地蔵堂のそばには桜がありますが、亡くなった若妻の心を語るように、春になっても蕾（つぼみ）すらつけたことがないのだといわれています。

（神奈川県教育庁「かながわのむかしばなし」から）

（注）泣の原の地蔵

大磯町虫窪のミカン山に囲まれた所に立っています。

大磯駅からバスで、虫窪経由「二宮駅」行き・二宮駅北口からバスで、虫窪経由「大磯駅」行きに乗り「富士見平」で下車してすぐです。

このあたり一帯を地元では、「泣野原」「嘆きの原」「泣ヶ原」とも言っています。

この地蔵尊の脇を通る道は、古い街道で黒岩・矢沢・金目・秦野へ通じ、また、大山参りの道としても賑わいをみせ、七国峠の茶屋とともに「庶民の道」として、重要な役割を果たしていました。

（18）相模国月牌帳（サガミノクニゲッパイチョウ）

高野山高室院に現存する相模国月牌帳とは、信者が相模国から、毎月先祖の命日に高德院まで参詣することができないので、参詣者は月牌供養料を納めて、その供養を一年間依頼するものです。

その供養料を納めたときの信者の台帳を「月牌帳」といいます。その内容は、供養料を納入した人の姓名・住所（国・郡・郷・村名）・法名・納入年月日・菩提供養する先祖との続柄・供養の目的等が書き込まれています。

月牌帳のもうひとつの大きな特色は、これまで全くつかめなかった相模国の庶民の姓氏が、この資料によって、少なくとも天文5年（1536）まで、さかのぼって辿り着くことができたことです。いままでは、天保11年（1840）に作成された「新編相模国風土記稿」に若干の村に、旧家の姓氏が所収されている程度でした。しかし、いずれも有力農民であり、これとて僅かであり、それほどの数ではありませんでした。

相模国では、天文5年（1536）から慶長17年（1612）までの間に、月牌帳には総計912名が参詣しております。そのうち812名が庶民の姓名で、100名が寺院名です。

慶長年間における、土屋の人々に次のような姓名が見えます。

・市川 善兵衛	慶長2年（1597）	7月13日
・大野 藤右エ門	慶長4年（1599）	7月14日
・水島 右エ門	慶長5年（1600）	7月 8日
・大野 善九郎	慶長7年（1602）	7月 9日

・石黒 図書	慶長7年(1602)	7月 9日
・杉山 孫七郎	慶長7年(1602)	7月 9日
・杉山 九衛門	慶長8年(1603)	7月11日
・西ヶ谷主水	慶長8年(1603)	7月11日
・上原 弥四郎	慶長8年(1603)	7月11日
・原 二郎左エ門	慶長8年(1603)	7月11日

〔資料提供 寺分 杉山憲三氏〕

